

25 遺物

星野博美

奇妙な夢を見た。

玄関に見慣れないビーチサンダルが一足置かれていた。その持ち主が「鈴木のおばさん」であることを、私は知っている。なぜおばさんのビーチサンダルがうちにあるのだろう、と訝しく思っ持ち上げると、サンダルの下に虫がてんこ盛りになっていて、慌てて置きなおす。すると長年放置して劣化しきったビーチサンダルは崩れ落ち、粉々になって玄

関に散らばった。

その前日、母と「鈴木のおばさん」の話をしたばかりだった。

おばさんは母の四十五年来の友人だった。苦勞が絶えない人だった。その苦勞を隠したくて虚勢を張ったり、強がったりするところがあつたので、うとましく感じる人も少なくなかった。なぜか母とはウマがあい、よくうちに入入りしていた。私も小さい頃からよくかわいがられた。私にとっては、いいおばさんだった。

あれほど自己主張が強い人は長生きするだろうと、きつと誰もが思っていた。少なくとも私はそう思った。彼女自身、体には氣をつけていたし、呆けることを誰よりも怖がっていて、いち早く認知症テストを受け

てもいた。ところが一年くらい前から急に元気がなくなつたかと思うと、みるみる痩せ細り、あつけなく亡くなってしまったのだ。

八十までは生きていたのだから、客観的には長生きといえる。しかし、もっと生きてもよかつた。

そして前日。週末に何人かのお客さんをお呼んでもてなすことになつた母は、大掃除をした。すると絵の具がこびりついた使いかけのパレットを発見した。鈴木のおばさんのものだった。

母は四半世紀ほど前から、自宅に何人かの生徒さんをお呼んで絵を教えている。おばさんも、ある時期うちに通つていたのだという。そのこと自体を私は知らなかつたので、通つた期間はそれほど長くはなかつたのだろう。

彼女にはそういうところがあつた。何かにすぐ飛びつくが、すぐに飽きてしまう。道具や持ち物を持ち帰るのを面倒くさがり、「そのうち取りに行くから」といって人の家に置いていく。彼女から物置代わりに使われた人の話もいくつか聞いたことがある。動物は自分の存在を主張するために、テリトリーのあちこちに臭においづけをする。彼女の行為も、一種の臭いづけだろう。パレット一つで済んだ母は、まだましなほうだった。

「これ、どうしたらいい？」と母に相談された。

「使えば？」

「いやだよ。縁起の悪い」

「じゃあ娘さんに連絡して、送ってあげれば？」

「それも面倒だし、第一、向こうだって困るだろう」

「でも、勝手に処分するわけにもいかないでしょ」

「だから困ってるんだよ」

母が困る気持ちは理解できた。鈴木のおばさんが生きていれば、たいしたパレットではないし、処分するのは簡単だった。そしてパレットがきれいに洗ってあればよかったものの、絵の具がこびりついたままというのが、逆に判断を難しくさせた。その人の行為の痕跡がリアルすぎるのだ。

おばさんは亡くなった。亡くなった人の物は、どんな物であれ、遺物である。供養もせずに処分したら祟られるのではないか、という一抹の不安が高齢者を襲う。

私は一つの場面を思い出した。西荻窪の銭湯である。

昔通っていた銭湯の脱衣所で、手が届かないほど高い棚の上に、埃をかぶった洗面器と風呂道具がずらりと並べられていた。その銭湯には、月極でいくばくかのお金を払うと専用ロッカーが借りられるシステムがあった。しかし銭湯に日参する常連にお金の余裕があるわけがない。いつしか勝手に道具を置いていく人が増え、そこらじゅうが風呂道具だらけになっていた。

一番高いところに置かれた風呂道具は、埃がこびりつきすぎて、ほとんど化石のようになっていた。その持ち主は、ただ引越したのか、あるいは忘れていったのかもしれない。しかしその「死蔵」されている感じが、まさに死を思わせた。風呂道具はじかに体に使う物なので、触れ

るだけで死が伝染するような忌避感覚を見る者に起こさせる。それらに見下ろされながら裸になるのは、あまり気持ちのいいものではなかった。人のところに物を置きたがる人を、私は恨む。残された側の苦悩を想像していない。

結局、母は結論を導くことができず、鈴木のおばさんのパレットを見えない場所にしまいこんだ。

ビーチサンダルの夢を見たことで、今度は私が昔を思い出してうなされることになった。母の「ケガレ」感覚が、完全に伝染してしまったのだ。

鈴木のおばさんといえば、「怖いお話」をしてくれる人だった。彼女は大変信心深く、親戚がお寺をしていたこともあり、不思議な話をたくさん知っていたのだ。

大人が子どもに怖い話をする時、声のトーンを変えて必ずサインを出す。「まだあたしが田舎にいた頃の話だよ」とか、「この話、あまりしたくはないんだけどね、聞きたいかい？」などと前置きをして、いきなり声を下げる。怖がりの子はこれで逃げ出し、聞きたい子だけがその場に残る。私はいつも、残るほうだった。

それはこんな話だった。

彼女がいつものようにお寺の会合に出かけると、檀家の一人がその場で倒れてしまった。

「まるで障子がいきなり倒れるみたいに、ボタン！つてさ」

すぐに救急車が呼ばれ、檀家さんは病院に運ばれた。残された人たちは、倒れた人の消息がわかるまでは帰るわけにもいかず、お寺で悶々と過ごした。しばらくすると、お寺の電話が鳴った。檀家さんがたつたいま、病院で息を引き取ったという。みんなでお経をあげ、じゃあ帰りましょうかと、パラパラと席を立ち始めたたちょうどその時だ。

「お堂の障子がボタン！ ボタン！つて、次々に音を立てて倒れたの。まるでさつき、檀家さんが倒れたみたいにさ」

驚愕して右往左往する人々。すると誰かが大声で叫んだ。

「玄関にまだ靴が残ってるぞ！」

一同真っ青になり、靴を遺族のもとに届けに行った。

「みんなが自分をおいて帰っちゃうのが、よっぽど寂しかったんだろ
うねえ。亡くなった人は、自分の存在を知らせるために、いろんなサイ
ンを送るんだよ」

その言葉が、忘れられないのである。